

---

# 光が満ちるこの世界で

雨と傘

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光が満ちるこの世界で

### 【Nコード】

N2796W

### 【作者名】

雨と傘

### 【あらすじ】

”光の神子”の召還の儀で召還されたのは異世界の3人の少女達。ツリ目が悩みの凜香と甘い物が大好きな小夜は突然の出来事に戸惑う。そして2人と共に召還された金髪少女”スズヨ”が光の神子に選ばれ、2人は殺されかける。運よく、助かるが、小夜は人形のように眠り続けたまま。凜香は2人を拾ったハウエルという老人の屋敷で働き始めた。それが、用意された道だと知らずに。《ほのぼのとシリアスが1：1が目標です》

## 物語の始まり

足掻くように生きるのは醜い事ですか？

憎しみを糧に生きるのは罪ですか？

苦しみの中で、痛みを堪え、罪を重ねながらも救いを求めるのはいけない事ですか？

なぜ罪無き者が罰せられるのですか？

罪とはなんですか？

答えてください神様。あなたは何でも知っているのでしょ？

「駅前ね、クレープ屋さんが出来たんだよ！」

学校の帰り道、幸せそうな笑顔で小夜が言う。絶対頭の中は甘いもので埋め尽くされているのだろう。目がキラキラとしている。

小夜は日本人にしては色素の薄い、栗色のふわふわとした髪で肩よりも短い。たまにハーフとかに間違われるけど、純粋な日本人だ。対して私はカラスの濡れ羽色と言われるほど、真っ黒な髪と目をしている、典型的な日本人だ。ちよつと目つきが悪いのがコンプレックス。小夜は「猫みたいで可愛いよ！」って言うってくれるけど…私は、小夜みたいになちよつと垂れ目でかわいい目が羨ましい。

「それじゃあ、明日にでも行こうか。」

「うん、そうだね。」

「頼むのは？」

「いちごチョコクレープとバニラアイスバナナ！」

「うっわ、甘そう。しかも二つも頼むの。」

「もちろん！3つ目もいけるよ。」

甘党の小夜は新しい店が出来ると私を誘う。私は甘いものはあまり好きではないけど、いつも一緒に行く。小夜の食べっぷりが面白いんだよね。それに可愛い幼馴染の頼みだ。断る理由もない。

「凜香は抹茶あずき？」

「んー、そうだね。」

「一口頂戴ね。」

「はいはい。」

いつもの帰り道。

いつもの話題。

いつもの日常。

昼間は太陽。夜は月と星。

風が吹いて雲が動き、車が道路を走って、子供の元気な声が聞こえる。夕飯のいい匂いで今日の夕飯は何だろうと想像する。

私の日常。隣に小夜がいる”いつも”の日々。

それが”いつも”ではなくなったのは、小夜の足元に光る模様が現れたから。それは小夜の足元から広がるように図を描いていく。

「小夜、なにか踏んだ？」

ぼやぼやとしている小夜の事だから変なものでも踏んだのかと思っただ。

「うーん、なにも踏んでないと思うけど。」

「とりあえず、そこから退いたら？」  
「うん。」

「ただ、光は小夜に着いていく。足元から離れない。  
なんだ、これは。」

「り、凜香ちゃん。」

小夜の声が震える。目は涙で潤んでいる。

「小夜、こっちにこい！」

「あ、足が動かないよ。」

嫌な予感がした。警報が鳴り響く。

光が強くなっていく。小夜が光に包まれていく。

やばい。

「小夜！」

光の中に飛び込んで小夜を抱きしめる。

光が爆発する。辺りは光に包まれて…光が消えた後には何も残って  
ていなかった。

そして私達は世界から消えた。

暗い暗い世界の中、君を抱きしめながら、誰かの声を聞いた

守れ、と。何度も何度も  
呪いみたい  
に  
誰かが、笑った気がした

## 舞踏会に呼ばれたシンデレラ

どれくらい光に包まれていたのだろう。気がつくとも私達は広い部屋の中にいた。大理石で出来ている部屋。いや、もはや空間と言っているほど広い。どこなのだろう…見覚えが無い。周りには煌びやかな服装の男達がいる。男というよりはじいさん達？若干若いのも混じってるけど。…じいさん達でいいや。めんどいし。

「なんと、3人も…。」

「神が我らに…たを…。」

「光の…しか…黒…。」

何を、話しているんだ。耳鳴りと頭痛でうまく聞き取れない。

「凜香ちゃん、い、息が、息ができまふえん！」

「あ、ごめん。」

小夜を抱きしめていたのを忘れていた。強く抱き締めすぎたみたいだ。力を緩めれば、ぷはっとな顔を上げる。顔が赤い。うん、ごめん。背中をさすって落ち着かせる。

「ちょっとあ、ここどこなのっ…！」

声の方を見れば、クリーム色の制服を着た金髪の女の子がそこにいた。誰だろう？あの制服みたことある。そういえば、その髭が3人とかなんとか言っていたような。

「凜香ちゃん、ここどこ…？」  
「分からない。」

金髪少女は相変わらず喚んでいる。うるさいのは嫌いだけど、ここがどこだか知りたいのは私も同じなので黙っておく。あ、頭痛いの治った。

ふと、人垣の奥に一層煌びやかな人がいるのに気がついた。でかい、王様が座るような椅子に座って男が退屈そうにこっちを見ている。じつと見ていると、立ち上がり、こっちに歩いてきた。道を作るように音もなく人垣が割れ、首を垂れる。

「…三人、か」

金髪に蒼い瞳。絵本から出てきたような王子様。静かになった金髪少女の方を見ると、顔が赤くなって固まっている。小夜も少し顔が赤い。…ああ、美形だからか。

「金に茶に…黒か。」

見定めるように、視線が動き…目が合った。反射的に小夜を背中に庇う。

「異世界からようこそ。光の神子よ。ここは人の国『アルディアス』。光に満ちた国だ。我は『カム』。この国を統治する王なり…まあ、いきなり異世界と言われても信じられないだろう。」

そういうと、男はなにかを呟き、指を鳴らした。なにもない床に、光が模様を描いていく。そして、ずるりと何かが出てきた。それは、白い獣。淡い光を纏って、狼にもライオンにも見える、見た事ない獣がそこにはいた。



あまりにも現実離れた出来事に、言葉が出ない。マジック<sup>手品</sup>、なのか？どこか冷静な頭に、現実的な答えがかすめたが、すぐに打ち消された。光の球がふよふよと浮遊し始めたからだ。

「これは魔法。選ばれた者だけが使える神なる力。

これで信じられたらう。異世界へようこそ、光の神子。歓迎する。」

お城に招待されたシンデレラ。

王子様は一目惚れ。

シンデレラの目印はガラスの靴。

王子様は国中を探し、ガラスの靴がぴったり合う少女を探し出しました。

一人は傲慢、一人は泣いてばかり、一人は勝気で少年のよう。ただシンデレラは一人だけ。

偽物はだれ？

## お菓子の家

それから私たちは風呂に入れられ、ひらひらの可愛らしい寝間着に着換えさせられた。しかも侍女さん達が懇切丁寧にやってくれるものだから、なんだかむず痒い。さすがに、体まで洗われそうになった時は辞退した。さすがに恥ずかしい。

私と小夜が通された寝室は、とても広い。ベッドが二つ置いてあったが、それでも広い。金髪少女は別の部屋みたいだ。

「ねえ、凜香ちゃん…私達、どうなるんだろうね」

ベッドに座り、ぼんやりと小夜が言う。真っ白い寝間着が良く似合っている。私の黒い寝間着とは色違いみたいだ。

「異世界って、言ってたよね。王様って言ってたよね。本当なのかな、嘘なのかな。でも、魔法は手品に見えなかった。本当みたいだった。」

とめどなく小夜の口からは不安が零れ落ちていく。

「…みんな、心配してるよね。お母さんやおばさんも探し回ってるかも。隆志くんも、きつと心配してる。」

「兄さんは、心配してないと思う」「ううん、心配してるよ」

その目からは今にも涙が零れそうで、私の胸がぎゅっと締めつけられた。

「…よし、小夜。立派なベッドが2つあって勿体ないけど、今日は

一緒に寝よう！」

小夜の返答を待たないで、一緒にベッドに倒れこむ。2人で寝ても広さには余裕がある。小夜は一瞬惚<sup>ほう</sup>けていたが、次の瞬間には花がほころぶように笑ってくれた。

「なんか、懐かしいね。」

「そうだね」

「そういえばね、あの金髪の子ね、”スズヨ”ちゃんって言うんだって」

「そうなんだ」

「あのね、凜香ちゃん」

ありがとう

「…どういたしまして？」

「ふふっ、なんで疑問形？」

向かい合わせて手を握り合う。温かい。

「おやすみ、凜香ちゃん」

「おやすみ、小夜」

規則的な寝息が聞こえてきて、口元がほころぶ。おやすみ3秒は相変わらずのようだ。

この世界が異世界だとして、だぶん中世に似た世界なのだと思う。この部屋の入り口には剣を腰に携えた男が2人、見張りをしていた。私たちの世話をした侍女の人達は丈の長いメイド服らしきものを着ていた。魔法がある、ファンタジーな世界。

『光の神子』ってなんなのだろう。

それに…私を見る目がなんだか怖かった。黒色だと囁き合う声と一緒に闇色だと囁くが聞こえた。たぶん、私の髪色の事だと思うんだけど…嫌な予感しかない。

「コツリとおでことおでこを合わせる。

「…おやすみ、小夜。良い夢を」

手にあるぬくもりを感じながら、私の意識はゆっくりと闇に沈んでいった。

兄妹が見つけたお菓子の家

そこに住むのは悪い魔女

甘い匂いに誘われて2人はお菓子の家に入っていく

引き止める者はなく 忠告する者もない

見ているだけの傍観者

哀れ2人は捕まってしまいました

ぐつぐつぐつぐつ鍋が煮える

助けてくれる者はいない

力を貸してくれる者もない

自力で逃げないと食べられちゃうよ

## 白い小石を目印に

朝、侍女のお姉さまたちに優しく起こされ、更に着替えまで手伝ってもらい、ひらっひらのドレスを着せられそうになって拒否。いや、ふりふり無理。可愛いけど無理。見るのはいいけど着るのは無理。ズボンを所望します。

小夜もコルセットを付けられそうになっていた。さすがに嫌だったのか、コルセットのないドレスを着ている。…ドレスと言うよりは、ワンピースとかに近いかも。可愛い。

その後、王様同伴で朝食。金髪少女：あー、鈴音ちゃんだっけ、は物凄く派手なドレスだった。装飾品も金。髪は高く結えられていて、ツヤツヤだ。目が痛い、チカチカする。それによく王様に話しかけられるな。怖くないのか？

で、現在、王様に連れられて数人の護衛に囲まれながら絶賛城の中を移動中。

城の中は広くて豪華。廊下も広いし、置かれている調度品も一目で高価な物だとわかる。窓を見れば、遠くに街並みが見える。それを見て、やっぱりここは異世界なのだと再認識した。心のどこかで魔法を見ても信じられなかった。

ぼんやりと物思いに浸っていると、王様が急に立ち止まり、慌てて立ち止まる。目の前には巨大な門。彫刻が施されていて、古そうに見えるその扉の存在感に少し圧倒された。

王様が片手で扉を押すと、勝手に扉が動いた。これも魔法なのだろうか。

そして、扉の向こうにあったのは

「うわあ、綺麗…。」

小夜が感嘆の声を上げる。私も声には出さなかったけど、同じ気持ちだった。

綺麗な青の水が泉のように満ちていて、中央には透明な石がある。石は泉から浮いているように見える。あの石：水晶？結構大きいな。石柱って言ったほうがしっくりくる。上は高いけど完全な天井なのに、光が降り注いでいる。

「ここは光の聖域。選別の間とも呼ばれている」

「超きれいじゃん、ここおっ！」

金髪少女、感動の邪魔をするな。

「ああ、美しいだろう？光の女神が守護をする場所だ。美しくないはずがない。」

たしかに、綺麗だ。光の満ちるこの空間も、少しの濁りもない水も、全てが…完璧すぎるほどに美しい。

王様が泉の中央にある石柱を指差す。

「あれは、光の女神が神子を選別するために地上に送ったと言われている”光の涙”だ。」

魔法を使える人間は少数だが、人は必ず属性とよばれる物を持っている。

火・水・風・土・氷・雷・光・闇：あの石に触れると火は赤・水は青・風は銀・土は緑・氷は白・雷は紫・光は金・闇は黒、といった具合に属性によって変化する。」

…闇と言う時、なんだか表情が変わった。苦々しい、恨めしい…

そんな顔に。なんだか、背筋が震えた。もしかして、私を黒だと言ったのは…闇が黒だから？

王様がなにかを唱えると、石に向かって泉に道が出来ていく。一人が通れる位の道幅だ。

「…スズネ、お前からだ」

「え、私い？」

口では文句を言っていたが、上機嫌で道を歩いていく。スキップでもしそうな勢いだ。

「…凜香ちゃん」

小夜が服の端を握り締め、不安げな表情で見上げてくる。

「大丈夫だよ」

そう言って、少しでも不安が無くなるように手を繋いだ。

そして、鈴与の手が石柱に触れ…金色に輝いた。

「なっ。」

思わず声を出してしまった。一瞬で金色に。どうなっているんだ。

小夜も驚いたのか、腕を掴む力を強くした。

笑顔で戻ってきた鈴与を迎える王様は満足げな様子だ。

「お前が光の神子なのだな。」

王様が鈴与の手を取る。

「光に愛された子よ、俺がお前を守ろう。」

そういうと、手を取り手の甲こめにキスをした。…うん、ちょっと引く。

「なっ、いきなりなにすんのよっ!」

そう言っつて、手を引っ込めるが満更でもないようだ。だって軽く笑っつてる。

「この者達はどついたしますか。」

目の前で起きた事に引いていると、いつのまにか剣を抜いた護衛たちに囲まれていた。…全く気配がなかった。

「凜香ちゃん…。」

怯える小夜を背中に庇う。神子様が分かったから私達は用無しって事?冗談じゃねえよ。

「…いや、まて。殺すのは属性を調べてからでも遅くは無いだろう。属性によつてはスズヨを守る盾にはなるかもしれん」

「え、可哀想だよ」

鈴与は王様の腕にひつついて、猫撫で声で言う。目が可哀想だと言っつていない。

あれの盾になるなんて、冗談じゃない。石を見れば透明に戻っている。周りに舞う七色の光がおいでおいでと手招きしているように見えた。



白い小石は道標みちしるべ

月明りに照らされて迷子を導く道標  
白い小石の代わりにパンをまいたら  
帰り道が分からない

鳥が食べて消えちゃった

遠くから狼の遠吠えが聞こえてくる  
2人は途方に暮れました

海に消える人魚姫（前書き）

流血表現あり

## 海に消える人魚姫

「黒…お前から行け」

今すぐにも小夜を連れて逃げ出したいけど、逃げ出せる状況じゃない。剣を持っている護衛たちに戦う術を持たない私たちは…最悪の結末しか想像できない。それに私の名前は”黒”じゃないとも言いついてやりたかったけど、喉に何か詰まったみたいに声が出ない。

「…わかった」それだけ言うのが精一杯だった。

小夜の手を離し石柱に向かって歩く。振り向くと小夜が泣きそうな顔をしてたから、へらりと笑って手を振る。そうすると、もつと泣きそうな顔になった。大丈夫だよ、私は大丈夫。…たぶん。

近くで見る石柱は私の身長の2倍は余裕でありそうな大きさだ。そして水面ギリギリの所で浮かんでいる。どんな仕組みなんだろうと考えたが、考えるだけ無駄だとすぐに止めた。

ゆっくりと石柱に手を伸ばす。石柱に触れると石独特の冷たさを感じ、なにかが吸い取られる感覚がした。

「っ…」

その感覚に背筋が泡立ち、すぐに石から手を離れた。そして私の触れた所から石の中に白い霧が生まれて、透明だった色が白に変わった。石に触れた手のひらを茫然と見つめる。なに今の…？来た時よりも早歩きで戻る。一秒でも早く石柱から離れたかった。とりあえず、私の属性は白だったから…氷？

「次」

無慈悲にも王様が小夜の番を告げる。

「はい…行ってくるね、凜香ちゃん」

小夜が石柱に向かって歩いていく。私に触ったことで白くなっていたのに、もう透明に戻っている。ゆっくりと小夜の手が石柱に触れた。

その瞬間、嫌な予感が胸をよぎった。心の奥底から、魂が警告している。

ダメ、アブナイ、キケン、モドツテ、コノママジャ、タスケテ、オカエリ、ニゲテ、アブナイ、ニゲテ、モドツテキタ、ウレシイ…悲しい？警告警告警告。頭の中で何かが叫ぶ。…頭が割れるように痛い。

痛みでぼやける意識の中で石柱の色が変わったのが見えた。色彩がゆらりと揺れる。

そして、石柱は漆黒に変わった。

「あ…」

真っ黒、冷たい光、柔らかい色、光の粒子が散っていて、満開の星空に見える。とても綺麗。

キケン

視界の端に王様が鈴音の肩を抱きよせ、小夜を指差すのが見えた。剣を持った男が私の横を通り過ぎていく

ダメ

茫然と魅入られたように石柱を見ていた小夜が、振り返った

男が剣を振り落とす

ニゲテ！

飛び散る赤い血とばしゃりと波紋を描く水面に何かが落ちた水音  
男が持っている剣からは血が滴り落ちている

何が起きたかは明確だった

「…小夜？」

血独特の鉄臭さが鼻をかすめた。

「あ、ああ、ああああああああアアアアアッ！」

獣のように咆哮して、怒りのままに拳を握りしめ、男に立ち向かっていく。走って男に近づくとつれ強くなる血の匂い。私は拳を男に振りかぶった。

だけど、その拳が届くはずがなくて、わき腹を何かが貫いた。触れると、刃物独特の感触。それが男の剣だと理解した時には、痛みで頭が朦朧としていた。

「あ、はは」

何故か分からないけど、自然と笑い声が出た。痛すぎて、それ以外の感覚が無くなっていく。転んで骨折した時の比じゃないなんて他人事のように思った。吐き出す息が熱い。

目の前の男の顔を見上げる。赤い髪緑の目。切れ目の精悍な顔立ち。鎧に隠された体は鍛え抜かれているのだろう。震える手をその頬に伸ばし、思いつきり爪を立てた。赤い線が頬に走った。男の目が見開いたのが滑稽だった。

「…ざまあ…み、ろ。」

世界が傾いていく。

ああ、人ってこんなときでも笑えるんだな、なんて思いながら、水に叩きつけられた。

水面で光が踊って、私の体はゆっくりと沈んでいく。赤い血が糸を引いて水に溶けていくのが見えて、血は液体なんだなといまさらながらに思った。

現実味のない事が立て続けに起こって、これは夢なのではないかと思ってしまう。だけど体を包む水の冷たさは本物で、血の流れ続ける傷口の痛みも、これが現実なのだと言っている。このまま、死ぬのかな？そんな考えが頭をよぎった。出血死？水死？どっちもいやだ。

小夜、小夜は？

身をよじって水底を見た。

小夜はいた。だけど手は力なく天を向き、ただ沈んでいつている。水は透明で青く澄んでいるのに、底が全く見えない。永遠に続いているように見えた。

傷口が痛むのを無視して深く潜っていく。小夜の腕をつかみ、引き寄せる。切られた胸元から止めどなく血が流れ続けている。頬を叩いても反応が無い。

やばい。

青白い肌が焦燥感を煽った。

早く陸に上がらないと。小夜を抱えて水面に向かって泳ぐ。

だけど、このまま上がってどうするの？きつと、あいつらはまだいる。殺されに行くのと同じだよ。

冷静なもう一人の自分が小馬鹿にした口調で言う。

…だけど、これ以外方法がないんだよ

泳いでも泳いでも水から出られない

河童のように水掻みずかきがあったらスイスイと泳げるのだろうか。

ついには我慢しきれなくなつて、ごぼりと口から泡が逃げていく。

苦しい。だけど、もう少しかから。あとちょっとだから。

ごぼりと肺から空気が抜けていく。

息が出来ない。空気の代わりに水が肺を満たしていく。

光が踊る水面に手を伸ばす

神様。このまま、私たちは死ぬのですか？冷たい水の中で苦しみの死をむかえるのですか？

なんで小夜だったんだ。なんで私だったんだ。スズヨとやらがが目的だったんでしょう。だったら私達は必要じゃなかったはずだ。なんで私達だったんだ。要らないんだったら連れてこなかったらよかったんだ。なのに、要らなくなったら捨てるの？殺すの？帰して私達を”いつも”の日常に帰して。訳の分からない世界に来て、訳の分からない魔法なんて見せつけられて、怖かった。敵意に満ちた目が怖かった。自分がどれだけ平和な所にいたのか理解した。これって誘拐と変わらないじゃない？あはは、訴えてやるうか。…ああ、でもこの世界ではどうやって訴えればいいんだろう。それに相手は王様。勝ち目ないね。悔しいなあ。泣き寝入りかよ。痛いよ。苦しい。私死ぬの？嫌だ、死にたくない。こんなの、あんまりだ。

お願い、誰か助けてよ

私の手をとってください

意識が霞み、遠のいていく

だれかが、手をつかんだ気がしたけど、きつと私の願いが見せた幻最後に見たのは、ただただ静かな蒼くて寂しい世界だった

## 小人の家

太陽の眩しさに眠りを邪魔されてうつすらと目を開ける。見覚えのない天井が見えた。どこだろうここ。まあいいや、眠い。ふかふかとしていて温かい物に包まれている。ベッドに寝ているのかな？昨日いつ寝たんだったっけ、ベッドに入った記憶がないんだけど。

…記憶があるわけない。だって私達は斬られて水の底に沈んでいたのだから。

眠気は吹き飛び、ベッドからとび起きて周りを見渡す。見覚えのない部屋。落ち着いた年季の入っているように見える木目調の家具が置いてある。服をめくって剣に貫かれたはずのわき腹を見れば、包帯が巻かれ手当されている。服も着ていた物ではなく新しくなっている。窓からは火の光が差し込んでいて、見ると森に囲まれているようだった。ここ、城じゃない…？

状況が飲み込めなくて困惑していると、唐突にドアが開き、女性が入ってきた。手に水張ったタライを持っている。

「あ、目が覚めたのね。気分はどう？」

服装はメイド服ではなく、高価には見えない深緑のワンピース。女性はベッドの横にある椅子に座った。

「え、あ、はい。…大丈夫です？」

しどろもどろに答えると女性はにっこりと笑って、

「よかった。本当に驚いたのよ。湖で倒れてだから。…あ、一緒にいた女の子は知り合い？」



湖で倒れていた？なんで？それより……一緒にいた女の子？

「小夜：小夜は無事ですか？！どこにいるんですか！」

女性の肩を掴み、詰め寄る。

「小夜は、どこ！」

「ちよつと、まった。落ち着いて！」

ずきりとわき腹が痛み、呻きながらわき腹を押さえた。じんわりと血が染み出てきた。

「……っあ、」

「ああ、もう！急に動いたら傷口が開くに決まってるでしょう！」

女性は服をめくり、血が滲んだ包帯をとっていく。そして傷口に手を当てた。

「《流れた血は生命の証 鼓動が止まれば死を表す 私はあなたの鼓動を助けます》」

女性の手が淡く光る。それはゆっくりと小さくなっていき、それに合わせるように痛みが引いていった。

「はい終わり。まだ完全には塞がってないから無理に動かない事！」

そして新しい包帯を手際良く巻いていく。

「……一緒にいた女の子は無事よ。だけど、今日は寝なさい。明日、

会わせるから。」

私はなされるがままにベッドに横たわる。

「無事なんだね？小夜は、本当に？」

「本当よ」

ふわりと布団をかけられて、頭を撫でられる。それが心地よくて、吹き飛んだはずの眠気が戻ってきた。

「本当に会わせてくれる？」

「ええ、だから今はおやすみなさい」

頭を撫でられるってこんなに気持ちよかつたんだ。蜜のような甘い心地よさに包まれながら、私は深い眠りの中に沈んでいった。

眠り姫は笑わない

眠り姫は笑わない

静寂に満ちた箱庭で、茨に守られながら眠り続ける

眠り続けるお姫様

夢もみないで眠り続ける

空腹で目を覚ました私にミアは消化に良いからとスープをくれた。その温かさに胸から込み上げる物があったが、スープを急いで食べる事で誤魔化した。ミアに「そんなにがつついたらお腹がびっくりするわよ」と微笑みながら窘められた。ちよつと嬉しかった。って叱られて喜ぶってMだったのか私！？いや断じて違う。私はSでもないけどMでもない。

ミアは食事の間にいるんな事を教えてくれた。

ここは国のはずれの人里から離れた深い森の中にある”ハウエル”という人の屋敷。ミアは唯一の使用人なのだそうだ。私達は近くにある泉のほとりに倒れていたらしい。

「ハウエル様が散歩している時に見つけたのよ。」

「そうなんですか…それで、小夜は？」

「…まだ、目を覚ましてないわ。それでも会うの？」

「会わせて下さい」

「…わかったわ」

ミアは溜息をつきながら「本当はもう少し安静にしてほしかったんだけど…本当にあの子の事が大切なのね」と言った。当り前だ。小夜は母がいとこ同士で物心つく頃からずっと一緒にいた、姉妹…

いや、双子同然。大切に決まっている。

小夜は私が寝ている隣の部屋に寝かされているという。少しの距離なのにミリアに支えられないと歩くのもままならないのが悔しかった。

「……」

寝ていた部屋の隣のドアの前に立ち、ミリアが言いゆくりと扉を開けた。

小夜はいた。身動き一つせずベッドに横たわっている。胸が上下する事だけが生きている事を証明していた。

「……小夜」

名前を呼んでも反応は無い。手を握ると温かった。肩に見える包帯が痛々しかった。

「よかった……本当に、よかった」

涙が頬を伝う。

生きていて本当によかった。あの氷のように冷たい水の中で、真っ青な小夜を見た時、死んだのかと思つて、怖かった。

小夜が斬られた瞬間が、脳裏に甦った。

あっけなく小夜は斬られた。私は、なにも出来なかった。ただ、見ている事しかできなかった。

「……ごめんね、ごめんね小夜っ」

何度呼びかけても、何度謝っても、小夜は人形のように沈黙する。

喜怒哀楽の见えない無表情の顔に胸が締め付けられた。声が聞けない事がこんなにも悲しいだなんて知らなかった。いくら悔やんでも過去は取り戻せず、後悔だけが心を蝕んでいく。

見かねたミアが止めるまで、私は泣きながらただ謝罪を繰り返していた。

## 白ウサギの時計が刻む音

泣きすぎて、赤くなった臉を拭うと、また涙が零れ落ちた。

「（この子は、夢の中でも泣いているのか。）」

少しでも、悲しみが和らぐようと頭を撫でる。

「眠ったのか」

「…はい、泣き疲れたのでしょ」

気配もなく現れた老人に、ミアは驚くことなく答える。老人は長く白い髭を撫でながら、感慨深げに言った。

「イリスが珍しく動揺しておったよ。」とりあえず様子見”じゃと”  
「そうですか」

カチカチと時計の針が動く音が静かな部屋に鳴り響く。

「…この子はずっとあの少女に謝り続けていました。心の底から叫ぶように。聞いているこっちが苦しくなりましたよ。…それで、搬送はいつに？」

「それがのう、どうも魔物の動きが活発になっているようだな。足止めを食らっているそうじゃ。」

「そうですか」

すると、ふおんつと空気が揺れた。

老人の緑色の瞳が鋭く光る。

「…5匹ですね」

「儂が行く。その子を頼んだぞ」

「はい」

老人は音も立てずに、まるでそこには最初から何もなかったかのように消えた。

部屋に残ったのはミアと凜香だけ。遠くで異形の者たちの叫び声が聞こえた。

「…今はまだ眠りなさい。来るべき時は、必ず来てしまうから」

少女の涙を拭くと、もう涙は零れてこなかった。

## 入口沢山 出口は一つ

私は、この優しさに裏があるなんて微塵も考えていなかったんだ。疑う事を知らないのは、自らの身を危険にさらすのに。守りたいものも、危険にさらすのに。

まあ、どんなにあがいたって、いきつく先は同じだったんだろうけど。

その老人は白く長い髭を撫でながら、深緑の瞳を楽しげに歪ませ、そこにいた。

”ハウエル”この屋敷の主。ミアの雇い主。私達を助けた人。

「…私達を助けていただきありがとうございます、”ハウエル様”」

ミアの魔法で（治癒魔法というらしい）傷が完全にふさがり（傷跡もなかった。治癒魔法すげえ）私はハウエルと対面していた。彼の書斎は壁一面に本棚が並べられ、所狭しと本が並べられている。

ミアはこの部屋にはいない。私と彼の二人きりだ。

「ふおっふおっふお、元気になったようじゃのう。」

「はい、おかげさまで」

そう、腹の傷は元々なかったかのように塞がり、私は元気になった。

「…お願いがございます。ハウエル様。」



私を、この屋敷で働かせてもらえませんか？」

元気になったのは私だけ。小夜はまだ目覚めない。傷もまだ治らず、もしかしたら残ってしまうかもしれないとミアアが言っていた。それに、私には行く所がない。この世界で私は赤子よりも無知で、無力だ。

「私には…いえ、私達には行く所がございません。御迷惑なのは重々承知しています。私にできる事はなんでもいたします。どうか、私を雇って下さい。お願いします」

膝をつき、顔を床にこすりつける。このチャンスを逃したら、私も小夜もどうなるか分からない。私達を助け、意識が戻っても追いつけなかったこの人の優しさに私は賭けた。

「…そうじゃのう」

沈黙の後、ハウエルが口を開く。

「顔を上げるのじゃ。…子供にそのような事をされて、断れるわけがないじゃろう。」

「それじゃあっ！」

顔を上げると、優しく微笑む姿が見えた。

私にはそれが、救いの手を差し伸べる神様のように見えた。ああ、後光が見えるっ！

「よいぞ。お主を雇おう。そのかわり、こき使っぞ？それでもよいか？」

「っ、ありがとうございます…！」



## 帰りたいね

私の朝は意外と遅い。

使用人として雇ってもらい、私の使用人のイメージから朝は滅茶苦茶早いと思っていたけど、そんなことはなかった。ミーアさん（先輩と付けようとしたが、ちょっと違う気がして”さん”をつけることにした）によると、この屋敷にいるのはハウエル様（ミーアさんを真似て”様”をつけている。”様”ってなんか違和感あるけど、雇い主だし…まあ、いいか）だから、朝早くからしないといけないことはほとんどないそうだ。ちなみに、ミーアさんのご飯は大変美味しい。

私のこととは、大体掃除とか力仕事だ。ミーアさんが掃除出来ない高い所とかを掃除するから、身軽な自分に感謝。あとはミーアさんの後にくつついて仕事している。そしたらハウエル様に「カルガモの親子みたいじゃのう」とほのぼのと言われてしまった。

ここの生活は意外と楽しい。どうなるか不安だったけど、2人ともとてもいい人だ。

「ハウエル様はね、たまにお菓子くれるんだ。ミーアさんは怒ると怖いけど…なんか、叱られても愛情を感じるんだよね。だからね、小夜。…早く起きて、一緒に仕事しよう?」

小夜は眠り続けている。身動き一つせず、胸の動きだけが生きている事を証明している。私は一日が終わると小夜に今日あった事を話す。

「今日は屋根に上って、煙突の掃除をしたんだ。想像以上に真っ黒

でビックリしたよ。それでね、ミアさんにね、助かったわあつて褒められたの。」

話す事が無くなって、ぼんやりと小夜を見つめる。

人形みたいだ。眠り続ける小夜を見るといつもそう思う。

もしかしたら、これは小夜にそっくりな人形ではないのかと、ふと思った。

「…そういえばさあ、小夜は覚えてる？バレンタインに初めてチョコ作った時にさ、砂糖と塩を間違えちゃったじゃん？あと、色々分量間違えてさ、まっずいのが出来てさ、それに気がつかないで配っちゃって、後で大騒ぎだったよね。絶対に不味いのお兄ちゃんさ、気合で完食したんだよ。」

作ったチョコを食べた瞬間、顔色が悪くなった兄を思い出す。一瞬にして赤から青に変わるものだと、感心したものだ。

「あれさ、私からも同じのあげたのに、私のは食べなかったんだよ。食べたのは小夜のだけ。…だからさ、脈はあると思うんだ。」

奥手な2人。買い物の時、二人つきりにしたら2人して赤くなって硬直していた。それが可笑しくって、嬉しくって。お母さんと、今も姉妹みただけど、小夜がうちに来たら、きつと楽しいだろうねって話して。そしたら、顔を赤くしたお兄ちゃんが怒って、それをからかって…

「帰り、たいね。」

あの温かい場所に帰りたい。

ぼつりと零した言葉は、誰にも拾われる事なく、空に溶けて消え

て  
い  
っ  
た。

## 文字

「うつわ…すごい埃ですね」

「でしよう？ハウエル様ってなんでもかんでも溜めこむ癖があるから、物が多くって…それで、本とかいろいろここに詰め込んでるのよ」

その部屋は本棚が並び、通っていた小学校の図書室を思い出した。歩くと埃に覆われた床に足跡がくつきりと残る。

「1人じゃ掃除するのがめんどくて、何年も放っておいたからこの有様よ。さーて、今日はこの部屋を綺麗にするわよ！」

部屋の物すべてに埃が積もり、よく分からない動物の剥製や、本棚に収まりきれないで床に積まれている大量の本を見て、私はこっそりと溜息をついた。

「づ…づかれた」

太陽が沈んで、空が暗くなっていく。

私はツルツルになった床に、四肢を投げ出して寝っ転がっていた。ほぼ一日ぶつ通しで掃除したから、物凄く疲れた。大みそかの大掃除並みに疲れた。ランプの光が薄暗くなった部屋を明るく照らしている。

どうやらこのランプ、蝋燭や電気は使われていないようだ。電球ぐらいの大きさの石が光っている。これも、魔法なのだろうか？

「ふふふ、お疲れ様。」

ゆったりと微笑むミアには疲労の色がまったく見えない。対して私は疲れ切っていて、もう動けない。恐るべしミアさん。

「リンが手伝ってくれたから、早く終わったわ。夕飯は仕込み終わっているから、休んでいいわよ」

「…すいません」

「いーのよ。」

ミアの言葉に甘えさせてもらう事にした。

一人きりになった部屋は、静かで少し寂しい。ぼんやりと天井を眺めていたが、ただ寝っ転がっているのにも飽きて、本棚に手を伸ばした。

うつ伏せになって、本をめくる。

知らない文字。ひらがなでもアルファベットでもない。知っているはずのない、文字だった。

「なんで、読めるの…?」

文字を指でなぞり、頭に浮かぶ単語を言葉にする。

「…」このように、属性は10に分類する事が出来る。精霊も同じく10の属性に分類される。なぜならば、それが世界の基盤であり、不変の法則なのだから。『』

知らない、私はこんな文字を知らない。習ってもいない、勉強もしていない。なのになんで読めるの？

怖い。知らないのに、知っている事が怖い。

助けて

日が落ち、肌寒くなった廊下を走り、小夜が眠る部屋に飛び込む。心の中は恐怖と不安でいっぱいだった。

「…小夜」

小夜の手を握ると、不思議と安心した。

目を閉じると、月の光は遮られて、漆黒の闇が世界を満たしていく。

読めた。知らないはずの、覚えた事のない文字が読めてしまった。本当は、この事実から目を逸らして、気付かないふりをしたい。だけど、これはこの世界を知る絶好のチャンスだ。本には、沢山の知識が詰まっている事を私は知っている。

「…ちょっとだけ、びっくりしちゃったよ。でも、ラッキー…なんだよ、ね？」

自分に言い聞かせて、怖いと、異常だと叫ぶ心を無理やり納得させた。



## 魔法の本

無知と全知

どっちが幸せになれるのだろうか

掃除した部屋の本を読む許可をもらって、私は庭で読書していた。日の光がポカポカと温かい。持ち出した本は魔法について書かれている本だ。

「魔法は魔力を元に行使される。魔力には属性があり、火・水・風・土・光・闇・植物・氷・雷に分ける事が出来る。火ならば火を操り、風ならば風を操る。だが、自分の持っている属性以外の力は操る事が出来ない。これは魔法を行使するにあたっての大原則だ。種族によっても、保有できる属性の数に違いがあるが、それは別の章で語っていこう。」

文字を指でなぞりながら、文章を声に出して頭に叩き込んでいく。ただ読んでいくよりも、声に出した方が覚えやすい。

「人間が魔法を発動するには、ただ”詠唱”をすればいい。全ての魔法には発動するための”詩”がある。この詩を唱える事を”詠唱”という。詠唱をすれば魔力が引き出され魔法が発動する。しかし、注意したまえ。発動の意思を込めて詠唱しなければ魔法は発動しない。そして、自分の力量と合わない魔法の詠唱をすれば、不発か暴発をする。不発はまだいい。暴発は自身の魔力を全て持っていないか、死ぬ事もある。また、操作を誤り、自身に魔法が襲いかかってくる事もある。私は”矢”の魔法が自分に襲いかかり全身をズ

タズタに引き裂かれた者を見た事がある。…くれぐれも、自身の力量にあった魔法を使うように。』」

…力量ってどう知ればいいんだろう？

ここまで読んで、やっぱり1人でやるには限界があると思った。知らない単語が多い。これは他の本と照らし合わせていけば大丈夫だと思うけど。

「…”詩”が分かれば、私にも魔法が使えるってことだよな。」

手に持っている本を閉じ、立ち上がるとお尻に付いた土を払い落とす。

私は、ミアが使っていた”治癒魔法”を思い出していた。たぶん、私が魔法に興味があると言えば、ミアは知っている事を教えてくれるのだろう。

…力をつけなくちゃ。

いつまでもここにいられるとは限らない。ハウエル様とミアさんは事情を聞かずにいてくれるけど、いつか話さないといけないなるかも。そしてら、追い出される可能性がある。殺される可能性だってある。

私は、小夜を守る力が欲しい。

目の前で、小夜が傷つけられるのを見ている事だけしかできなかった、無力な私。もう、あんな思いは味わいたくない。

力が、欲しい

強い力が誰にも負けない力が屈しない力が全てを薙ぎ払える力が全てを喰らう力が壊せる力が…欲しい、欲しいよ

なんで、そこまで力を求めるの？

冷静な私が、呟いた。

たしかに、魔法が使えればいいと思うよ。弱いよりは強い方が良いし、楽しいよ。だけど、なんで小夜を守らないといけないの？見捨てちゃえばいいじゃん。小夜は今動けないよ。それってさ、抵抗できないって事だよ。ほら、その手を首に添えてごらん？そしてゆっくりと力を込めるんだ。そうすれば、守らないで済むよ。力を求めないでいいんだ。ほかに方法も沢山ある！

だめだよ。そんなのだめだ。

なんでダメなの？凜香の枷になってるのは小夜だ。小夜さえいなくなれば凜香は自由になるんだよ。

…それでも、だよ。

…どうして？

だって私は

「…リン？」

誰かに肩を揺らされて、はっと顔を上げる。ミアが顔を覗きこんでいた。

「どうしたの、しゃがみこんで？具合悪いの？」  
「え？」

いつのまにか、私はしゃがみこんでいた。全然、気がつかなかっ

た。いつものまに。

「…大丈夫、ちょっと目眩がしただけ」

「そう？無理はしないでね」

「わかった」

地面に落ちていた本を拾い上げ、ついていた土を軽く払う。ミアに、表紙が見えるようにして。

「…あら、リン、魔法に興味があるの？」

「うん！」

ほら来た。優しい世話好きのミアさんの事だから、無視できずがない。

私は、満面の笑みを作った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2796w/>

---

光が満ちるこの世界で

2012年1月14日23時53分発行